

害虫編

注意が必要な害虫とは!?

① アブラムシ類は 発生前に被覆資材を

モモアカアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ、ダイコンアブラムシなどが発生します。アブラムシ類はモザイク病を伝染するので、防除は欠かせません。飛来が多い時期には防虫ネットを被せることが重要で、播種後に「サンサンネット」などでトンネルがけします。また、畝面のシルバーポリマルチも効果的です。毎年発生が見られる場合は、播種時にダントツ粒剤、アクタラ粒剤5などを施用します。発生が多い場合は、スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤などを散布します。

② 春と秋に発生する コナガ・アオムシ (モンシロチョウ幼虫)

春まきでは5〜6月、秋まきでは9〜10月に発生します。幼虫が葉を食害し、コナガでは主に芯付近の部分を、アオムシでは葉全体を食害します。発生が多い場合には、ほとんどの葉を食害します。

多発が予想される場合は、播種後に防虫ネットをトンネルがけて成虫の産卵を防ぎます。発生が見られたら、コナガではアフーム乳剤、デアアナSCなど、アオムシではマラソン乳剤などを散布します。

③ 一晩で葉を 食い尽くされる恐れのある ヨトウムシ類

ハスモンヨトウが8〜10月、ヨト

ウムシ(ヨトウガの幼虫)が5〜6月と10月ごろに発生します。成虫が卵を100〜200ほどの卵塊で産卵するため、幼虫は集団で葉を食害します。幼虫は大きくなると体長が3〜4cmとなり、昼間は土の中に潜んで、夜間には地上に現れて葉を暴食します。

発生が見られたら、ハスモンヨトウではデアアナSC、プレオフロアブルなどを散布します。

④ キスジノミハムシは 行動範囲も広く 食害する

成虫は体長が3mm、体色は黒褐色で黄褐色の筋がある甲虫です。後脚が発達しており、日中でも跳躍して移動します。成虫は葉を食害し、カブの表面に1mm以下の丸い穴を開けます。また、幼虫は土壌中の根を食

害し、褐色の食害痕が点々と不規則に生じ、激しい場合は表面がさめ肌状になります。毎年発生の見られるところでは、播種時にスタークル粒剤、ダイアジノン粒剤5などを施用します。成虫の発生が多い場合は、スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤などを散布します。

⑤ カブラハバチは 秋の多発に注意

成虫は体長7mm、頭部は黒色、胸と腹部は橙黄色のハチで、幼虫は大きくなると体長15mm、体色は光沢のある黒藍色です。幼虫が葉や地上に出た根を食害します。年3〜4回、5〜11月に発生し、特に秋に発生が多くなります。

発生が多い場合には、マラソン乳剤などをていねいに散布します。



ニセダイコンアブラムシ



コナガ幼虫



アオムシ(モンシロチョウ幼虫)



ハスモンヨトウ幼虫

(木村 裕 原図)



キスジノミハムシ成虫



カブラハバチ幼虫

※文中で紹介している農薬は、タキイでは取り扱いのないものもございます。ご了承ください。また、農薬をご使用の際は必ず登録の有無や使用方法をご確認ください(編集部)。

病害編

注意する病気と対策

①モザイク病はアブラムシを防ぐ

アブラムシの発生の多い時期に栽培するとモザイク病被害が発生します。葉が緑色の濃い部分とやや黄色っぽい部分が入り乱れたモザイク状になります。中心部の芽の部分が黄化し、生育が悪くなります。病原菌は、アブラムシの吸汁によって、キユウリモザイクウイルスなどのウイルスが感染するのが原因です。アブラムシの発生時期では、寒冷紗やベタがけ資材で苗を被覆するか、殺虫剤を散布してアブラムシを防除します。

②黒腐病が発生する前に予防防除

秋作のカブで発生が多く見られます。葉の葉縁部から黄色の病変が生じ、葉脈が黒変します。発病が進むと葉全体が黒変します。病原菌は土壌中に生息する多侵性の細菌で、キヤベツ、ブロッコリー、ダイコンなどに感染します。種子伝染し、土壌中の病原菌が風雨で飛散して、葉の

葉縁部の水孔や気孔から感染します。コサイド3000、Zボルドーなどの銅水和剤やヨネボン水和剤を予防的に散布します。

③胞子が飛散して伝染する白さび病

葉裏に乳白色の膨れた斑点を生じ、後に表皮が破れて内部の白粉が飛散します。葉の表面には、黄色い周辺のぼやけた斑点ができます。症状が激しいと葉が厚くなり、奇形になることがあります。茎、花柄でも同様の病斑を生じ、病斑部が肥大して奇形になります。白色粉状のものは病原菌の胞子で、胞子が飛散して伝染します。白さび病はダイコンやブロッコリーにも発生しますが、病原菌の系統は異なり、カブへは伝染しないといわれています。

④根こぶ病の被害は生育を阻害する

発病を認めたら、ランマンフロアブル、ライメイフロアブルなどを散布します。

苗の根がこぶ状になり、生育は悪く晴天時にしおれが発生します。こぶは白色〜淡褐色で大きく、表面が滑らかでシワがないのが特徴です。気温が高いと、こぶが軟化して腐敗

します。播種直後にこぶができるとう生育不良やしおれが発生し、苗が奇形になります。被害株は正常なカブにならず、商品価値がなくなります。病原菌は土壌中に休眠胞子の状態で生息し、アブラナ科作物の根に感染します。防除対策として、ランマンフロアブルやオラクル顆粒水和剤を処理するか、土壌消毒します。

⑤萎黄病の発生圃場は土壌消毒を

株の片側の葉が黄化したり、葉の半分が黄化したりする症状が見られます。罹病株は生育が悪くなり、激しい場合は枯死します。葉柄や株元

を切断すると維管束が褐変しており、症状が軽い場合でもカブの部分で切断すると、中心部の維管束が淡褐色に変色していることがあります。発生圃場は土壌消毒が必要で、キルパーなどの土壌くん蒸剤を処理します。

⑥高温・過湿期に発生しやすい炭そ病

葉に水浸状で凹んだ小斑点が多数生じ、病斑は拡大して灰褐色〜胚白色になり、病斑部に穴があきます。気温が高い過湿条件下の8〜10月にかけて発生が多いため、秋まきのカブで発生しやすくなります。

カブはやや冷涼な気候を好むことから、秋まきが作りやすい作物です。肥えた土壌と広めの株間が必要で、小カブで10cm、中カブで20〜25cm、大カブで40cm程度の株間とし、施肥は10㎡に化成肥料(N:P:K=8:8:8)を1.2〜1.5kg程度とします。

病害虫ではモザイク病、黒腐病、根こぶ病、コナガ、キスジノミハムシ、カブラハバチの被害に注意します。



(木曾 皓 原図)



(木曾 皓 原図)



(木曾 皓 原図)



(木曾 皓 原図)



(木曾 皓 原図)



(木曾 皓 原図)